

児童文芸雑誌『北の子供』解題（二）

谷 暎子

目次

はじめに

- 一、北海道教育紙芝居協会と新日本文化協会
 - 二、新日本文化協会の文化事業の構想と児童文化活動
 - 1 新聞広告にみる文化事業の構想
 - 2 新日本文化協会の児童文化活動の歩み
 - 三、『北の子供』の編集に関わった人々
 - 1 揺籃期に活躍した中村篤九
 - 2 児童文学作家への道を拓いた和田義雄
 - 3 編集に関わった人々
 - 四、『北の子供』と人形劇団「こまどり座」
 - 五、『北の子供』時代の児童文化活動・運動
 - 1 出版界の活況と児童出版物
 - 2 科学新聞『子供の国』と「クレオン座」
 - 3 『北の子供』創刊三周年愛読者大会と「札幌子供の友会」
 - 六、『北の子供』の評価について
- むすび

はじめに

『北の子供』は、北海道の子どものために発行されていた児童文芸雑誌である。創刊は一九四六年四月で、一九五〇年一月まで続き北海道の子どもたちに親しまれた。

北海道の戦後児童文学・文化の歩みは、『北の子供』から始まったといつてよい。従つて、『北の子供』ぬきに北海道の児童文学・文化は語れないといわれてきた。にもかかわらず、その全容は解明されないままであった。そこで、『北の子供』全三十八冊の細目を作成し、その概要を「児童文芸雑誌『北の子供』解題（一）と細目」（注一）としてまとめた。

本稿では、その後の調査で得た資料に基づいて『北の子供』の発行所である新日本文化協会、編集に関わった人々、『北の子供』時代の札幌の児童文化活動について明らかにしたい。

一、北海道教育紙芝居協会と新日本文化協会

『北の子供』の発行所は、財団法人・新日本文化協会（通巻第二号から）である。同協会は、「終戦と同時に誕生した」（注二）と記されていたこともあって、戦後の新興出版社だと考えていた。しかし、紀国谷良雄氏（注三）の証言により、同協会の前身は、北海道教育紙芝居協会であることがわかった。このことは、先行文献にも全くふれられていず、聞きとり調査でも語られなかった部分である。後述するが北海道教育紙芝居協会は、国策宣伝、戦意昂揚の紙芝居を提供する北海道の元締めのようなところであった。従つて、戦争協力への責任が問われるような活動内容を含んでいたからだと考える。

北海道新聞・一九四五年十二月一日の広告欄には、両協会名——北海道教育紙芝居協会と新日本文化協会の理

事長・佐藤信一の挨拶文が掲載されている。文面からは、①北海道教育紙芝居協会の創立が「昭和十六年十二月」であること、②これ以降は、新日本文化協会紙芝居部と改称し再発足すること。③既刊作品は検閲中なので、改めて発表するまで使用を中止してほしいことなどが読みとれる。

「昭和十六年」が、どのような年であったのか、児童文化に焦点をあててみたい。同年四月、国民学校制度がスタート、子どもを皇国民として練成し、戦力として育てる思想に貫かれた。十二月八日太平洋戦争に突入。同月二十三日には「小国民文化協会」の創立記念総会が行われている。この協会は、日本の児童文化のあらゆる分野を網羅した組織であり、児童文化もまた、戦争遂行政策の一環として組みこまれたことを意味する。

紙芝居は簡便であること、視覚に訴えるので興味を喚起しやすく効果的であること、幅広い年齢層を対象にできるなどの特徴をもつ文化財である。戦中、教育紙芝居は国策宣伝、戦意昂揚の有効なメディアとして活用されたのだ。日本教育紙芝居協会の代表だった佐木秋夫は東京裁判（極東軍事裁判）に出廷し、紙芝居が戦争遂行のメディアとして使われたことを証言している。現在では、紙芝居は幼児・保育教材と思われることが多いが、戦中はその七〇パーセントが大人を対象としたものであった。日本教育紙芝居協会の作品目録（注4）をみると、「貯蓄」「銃後後援」「常会・一般・和楽」「写真」「宗教」「幼児」「厚生」「伝記」「教材」「銃後生活」に分類されていて、いかに大人を対象にしたものが多いかがわかる。

日本教育紙芝居協会は、一九三八年松永健哉らによって設立された。同協会の前身である日本教育紙芝居連盟や協会の初期には、学校教育、社会教育での紙芝居の活用を提唱、紙芝居の製作、出版、研究などをすすめていた。しかし、一九四二年には、朝日新聞社の出資で設立された日本画劇会社と提携し、「異体同心」の組織となる。以後、主として国策宣伝、戦意昂揚の紙芝居製作・出版と、普及部員による講習会などの普及活動に力が注がれた。同協会は、「一九四一年（昭和十八年）後半から全国的に組織を網羅」（注5）していったという。北海道教育紙芝居協会も、この動きに呼应して設立されたと考えられよう。

北海道教育紙芝居協会の活動を知る唯一の手がかりは、日本教育紙芝居協会の機関誌『紙芝居』である。一九四三年新年号の「北海道の旅」には、次のように記されている。「札幌には「北海道教育紙芝居本部」というのがある。自分のところでも、一、三発行してはいるが、主として教育紙芝居協会の作品を取次いでいる。(中略)この主な仕事はむしろ「北海道教育紙芝居利用組合」にあるように思った。国民学校や産報関係で利用するものが多いようだ。」(注6)

また、同年十月号には、北海道教育紙芝居協会の主催で、八月に札幌、岩見沢、小樽などで講習会を開催したとある。このように同協会は、国民学校、役場、町会、幼稚園、寺院などへの紙芝居の貸出し、取次販売が主な仕事で、ときに普及をかねた実技講習会の開催、紙芝居の製作・出版も行っていたようだ。

敗戦の翌月(九月)には、「新ニッポン明朗建設運動を北海道の戦災地を主として紙芝居を実践」(注7)したという。国策宣伝、戦意昂揚の紙芝居のほかに、名作童話、昔話、伝記物語、創作などの紙芝居もあったわけ、それらを利用したものと思われる。それにしても、戦中は戦意昂揚の活動、戦後直ちに改称して新ニッポン明朗建設運動を展開したことを、どう理解したらよいのか。当然、戦争協力への責任が問われると思うが、今のところ、それを知る手がかりは得られない。

二、新日本文化協会の文化事業の構想と児童文化活動

1 新聞広告にみる文化事業の構想

一九四五年十一月十八日の北海道新聞には、新日本文化協会の広告が掲載されている。ひととき大きく(六・五センチ×二七・五センチ)人目をひく内容からは、同協会の文化事業の構想を知ることができて興味がつきな

い。「新日本文化協会ハ札幌ニデキタ文化団体デス」、「サテ文化トハイッタイ何者デシヨウカ」との問いかけから始まるもので、要約すると次のようなものである。

△大人のための出版活動▽

文芸雑誌『放談』、月刊漫画雑誌『蛙』。女流作家叢書・窪川稲子著『くれない』、出版承諾ずみの作家・壺井栄、芝木好子、松田解子。中村篤九著『阿呆正伝』、塚本長蔵著『明朗学校』

△「文化の家」構想▽

○エルム文化学院創立事務所——タノシイ学校・教養ノ学校ノ準備デス

○ギャラリー「河の流れ」——画廊デハイツデモスバラシイ芸術ニフレルコトガデキル

○農民芸術研究会——農民ノ情操ノタメニ

○北方輿論調査研究所——アナタニイタイコトハナイカ

○北海道児童文化教材研究会——コドモニ何ヲアタエヨウカ

○北方工芸工房——アイヌ芸術ノ再現

○演劇の部屋社——新シイ演劇ノ産室

同協会の事務所には、詩人の百田宗治、画家の能勢真美、国松登、彫刻家・挿絵画家の梁川剛一、ジャーナリストの藤沢健夫、漫画家の中村篤九などが出入りしていて、「何となく文化人のサロンのような雰囲気か漂っていた」（注8）という。戦争の重圧から解かれ、自由に発言できる喜びを感じながら、熱っぽい文化談義が繰り広げられていたのではないか。広告をみてみると、集まってきた文化関係の人々の夢が、そのまま同協会の事業構想となつて掲載されているように思えてならない。

ところで、子どものためにはどのようなことが考えられていたのか。

○「子供達ノタメニコンナ本ヲツクリマス」——「春の絵本」「冬がくるくる」『小使サンノ日記』。企画申『タノ

シイ動物』『樹木のいのち』『ポカポカ完チャン』

○「子供達ノタメニコンナ玩具ヲツクリマス」——「アタラシイ文字合せ」「イロ紙」「生キテイル人形」「英字カルタ」「輪投」「羽子板」ほか

○「少国民ノ為ニコンナ会ヲ催シマス」——「新ニッポン子供会」十一月二十日、東宝劇場

この広告には、児童雑誌のことも、『北の子供』の名も出ていない。従って、この時期には『北の子供』はまだ構想されていなかったといえよう。「鈴木三重吉が創刊し、新しい文芸の創造に貢献した『赤い鳥』にちなんで郷土の児童文芸雑誌を創ろうと『北の子供』を出すことになった」(注9)のは、十二月以降のことだと思われる。

広告文の間には、「澁刺トシタ女性ヲ求メテイマス」「手工ノスキナ少女ヲ求メテイマス」という求人広告も挿入されている。

前述の構想にある「文化の家」は、実現しなかったし、出版——文芸雑誌、月刊漫画雑誌も三号雑誌で終り、女流作家叢書もそう長くは続かなかったようである。経営状態が悪化し事業縮少のなかで『北の子供』が残ったのはなぜか、大変に関心のあるところだが詳細を知る手がかりは今のところない。

2 新日本文化協会の児童文化活動の歩み

新日本文化協会になってからの、児童文化活動を辿ってみたい。

新ニッポン子供会

前述の広告が掲載されたすぐ後の十一月二十日(一九四五年)、東宝劇場で開催。翌二十一日の北海道新聞によると、子どものための「戦後最初の催し」だという。午前の公演を終えたとき、「会場を囲む子供達は六千人近くとなり大混乱、MP、巡査も出動」したが収拾がつかず午後公演は中止。子どもたちは、「巡査の叱咤の

声にもあきらめきれず一時間余りも会場近くを去りやらず群れていた」という。長い間、楽しみから遠ざけられていた子どもたちの期待が、いかに大きなものであったかを物語っているといえよう。

おもちゃの国展覧会

子どもたちに楽しみを」と、次に企画されたのが「おもちゃの国展覧会」である。三越デパートを会場にして、一九四六年一月中旬に開催。展示する玩具類は全て借用。実践部員が市内を走りまわって集めたという。おもちゃや人形、絵本、雑誌などの展示コーナー、紙芝居の上演コーナー、そして子どもたちの希望に応じて絵を描くコーナーなど、どこも子どもたちで満員だったようだ。

実践部が中心となって行ったこうした活動は、『北の子供』創刊後は読者を対象とした活動に変わっていく。子ども会活動

一九四六年五月「北の子供発刊記念子供会」を「北の子供会館」で開催。口演童話、紙芝居、舞踊、レコード鑑賞、児童劇などのプログラムである。劇を演じたのは「銀の鈴子供会」で、実践部の紀国谷良雄氏が事務所近くに住む子どもたちを集めてつくった子ども会であった。こうした地域の実践活動ばかりでなく、地方の子ども会活動の援助も積極的に行っていたようだ。創刊号の「文化だより」には、「古平町の『仲よしクラブ』に呼ばれ」て、子供会を開催したと報告されている。また、五月号には、次のような呼びかけもある。「地方に対しても出来るだけ援助したいと思っていますから、何時でもご一報下さい」。「文化だより」は、通巻五号までしか掲載されていないし、実践部もいつ頃まで活動していたのか『北の子供』にはその後関連の記事はみあたらない。愛読者のための林間学校

一九四六年夏休みの八月五日〜十一日まで、三百名の愛読者を招待して開催。会場は、当時は札幌の郊外だった中の島の興正保育園の林間。この保育園の園長・秦元勝は、興正寺の僧侶で新日本文化協会の理事でもあった。林間学校のプログラムは、充実したもので、高倉新一郎の札幌開拓の話、林敏雄（市立病院長）の衛生の話、

『北の子供』児童文章の選評者・飯田広太郎の綴方の話などと、孵化場見学、口演童話、紙芝居、ゲームなどが行われている。ほかに後述する『北の子供』創刊三周年記念愛読者大会、「北の子供会（聴く雑誌の会）」などが行われた。

三、「北の子供」の編集に関わった人々

1 揺籃期に活躍した中村篤九

創刊号の奥付には、編集人・新日本文化協会教材研究会となっており、個人名はない。解題（一）で述べたように、中村は新日本文化協会の編集長として活躍したが、『北の子供』揺籃期に力を発揮した人としても忘れられない存在である。

中村篤九は札幌出身の漫画家で、中学時代から漫画を描いていたようだ。『北海道漫画』第十三号（一九二八年）に作品を発表、「札幌一中を出たばかりのハツラツたる小壮漫画家」と紹介されている。二十歳の頃上京、新劇のアルバイトなどさまざまな仕事をしながら漫画を学ぶ。近藤日出造、杉浦幸雄らと一九三二年「新漫画派集団」（のち漫画集団）を結成し漫画家として活躍。初期にはマネージャーとしてもその才を発揮したという。

杉浦幸雄は中村の漫画について、次のように述べている。「特異な絵で不思議な漫画をかきましたが、なんといつても文章が秀でていました。絵と文で実に面白い風刺皮肉のきいた奇異な作品を発表して皆を驚かせました。」（注10）また、札幌出身の漫画家・おおば比呂司は、「篤九さんの『馬力』を見ると後輩であるうとなかろうとエキサイトするものである。漫画集団に入ったとき、私はひそかに第二の中村篤九さんになろうと思った。（中略）その精神を学びとること」はいいことであろう。」と書いている。（注11）中村はリベラリストで、時代

をみる目をもつ行動的な人だったと聞く。戦争で言論統制が厳しくなって活躍の場もなくなり、郷里の札幌に疎開したようだ。

戦後、新日本文化協会の編集長になったのも、時代感覚を買われてのことだという。月刊漫画誌、女流作家叢書、『北の子供』などの企画は中村によるところが大きいといえよう。この時期、家庭雑誌『ぼとん』（子供の国）に漫画などを寄稿、『阿宝正伝』（新日本文化協会）、絵本『青空坊ちゃん』（北櫻社）を出版している。のちに、漫画家として活躍を期待されながら、上京を前にした一九四七年六月急逝した。

2 児童文学作家への道を拓いた和田義雄

和田義雄が新日本文化協会に入ったのは一九四六年三月なので、『北の子供』出版の構想には参画していなかったことがわかる。しかし、スタッフの出入りの激しかった同協会で、創刊時から終刊まで関わった人として貴重である。通巻二号から六号までは編集人として、一九四七年四月からは「新協参与」（注12）として運営全般に関わり、翌一九四八年秋から廃刊までは、『北の子供』宣伝拡張のために結成された人形劇団「こまどり座」の巡演が主な仕事であった。こうしてみると、『北の子供』の存続に熱意を傾けてきた和田の姿が浮彫りになる。

もう一つ見落としてならないのは、和田が児童文学作家としての地位を築いたのが『北の子供』時代だったということである。代表作である『峠の子ら』は、和田のはじめての創作童話で、初出は『北の子供』である。童話集『白い劇場』（石川文化民報社）に納められ、壺井栄や吉田甲子太郎の推せんで『日本少年代表選集2』にも収録された。また、放送劇として全国放送もされている。「峠の子ら」は、和田が児童文学作家としての地位を築いた記念碑的な作品といえよう。

和田自身もこの作品には、ことのほか愛着を抱いていたようである。彼が児童文学に関心をもち童話作家になったのは、「あの美しい故郷の自然と、そこに若き日幾年かを、教師として過された沈黙先生の影響による」（注13）

と書いている。「峠の子ら」の舞台は和田の故郷の村や学校であり、登場するチンモク先生のモデルは支部沈黙である。また、『北の子供』専属の人形劇団「こまどり座」の巡演活動のなから生まれた作品ともいえよう。文中には、巡演で出会った子どもたちとの交流が息づいていて興味深い。

ここで和田の生い立ちにふれたい。和田は一九一四年旭川生れ。父は上川支庁の測量技師で俳句をし、母は和歌をたしなんだという。彼が六歳の頃、父は三十一歳の若さで病没。その後、貝沼村（現・美唄市光珠内）に住む祖父母に育てられる。村の小学校教師だった支部沈黙と出会い、童話、童謡に関心をもち、やがて投稿少年となる。『小学生キング』（札幌キング社）、『北海道小学新聞』（北海道小学新聞社）などに童謡、俳句、短歌などを投稿、『小学キング』の地方少年記者、『北海道小学新聞』の地方幹部にもなっている。この頃、級友と作品誌『董屋』を発行。二十歳で歌集「丘の細道」を刊行。召集で満州に渡り、『月刊満州』、『満州日々新聞』に短歌、小説などを寄稿。一九四二年には新京で画劇班班長となる。この頃、『月刊満州』の編集長・工清定（注14）と出会い親交を深める。敗戦の年の十月旭川に復員、翌三月新日本文化協会に入った。ちょうど『北の子供』創刊号を出す準備で、活気に溢れていた頃である。以後、和田は『北の子供』を育てることに力を注ぐなかで、児童文学作家としての道を拓いてきたといえよう。

3 編集に関わった人々

編集人、桜井志郎、名達修治については手がかりが得られない。大野謙次（一九二二〜一九四八）については、姉の小川富子氏により次のようなことがわかった。札幌の中学を卒業後、道庁の臨時職員を経て、新日本文化協会に入り『北の子供』の編集に携わるようになった。大学進学を望んでいたが、健康のこと、学費出資者の兄が戦死したことで断念。当時、盲腸炎で入院、順調に回復したが、退院を前にして事故にあい二十六歳で急逝。読書好きの青年だったという。

そのほか、『北の子供』初期に編集に関わった人として奥田孝位、笠井明子、紀国谷良雄、島野功などがいた。奥田は早稲田大学出身。『北の子供』創刊号（三号）までの編集に関わったのち、童話雑誌『おはなし』（自由建設社）の編集に携わった。その後、北海道教育委員会事務局視聴覚係長を勤めた人である。

四、『北の子供』と人形劇団「こまどり座」

人形劇団「こまどり座」は、『北の子供』の宣伝拡張（ときには集金も兼ねた）のために結成された。「こまどり座」の構想は、当時、和田が所属していた劇団「ともだち座」の経験から生み出されたものと考えられる。「ともだち座」は、一般演劇で活躍していた五條彰が結成した劇団である。第一回の公演（一九四七年十二月）のプログラムをみると、新日本文化協会の和田義雄、小林英一（実践部長）、高橋登志子（編集部で『近代人』の編集）の三名が出演している。翌年には、人形劇をもって炭鉱などを巡演したが、やがて五條は主宰していた劇団「自由劇場」の活動が忙しく、「ともだち座」は実質上活動を停止。この間に催された『北の子供』創刊三周年記念愛読者大会（一九四八年六月五日）に、和田は「劇団・こまどり座」の名で人形劇を上演している。「こまどり座」の発足時期は資料によって異なり確定は難しいが、公演記録にも「自一九四八年六月」（注14）とあるので、愛読者大会が旗揚げ公演だったと推測できよう。

「ともだち座」に加わっていた新日本文化協会の三名が、地方巡演したこと、子どもたちとの交流に魅力を感じたことなどの経験から、『北の子供』の宣伝拡張に人形劇団を結成しようと考えたのではないか。少人数で上演でき、移動も容易にできる人形劇団は、広い北海道の巡演に都合良かったに違いない。

「こまどり座」の公演は、「北の子供会（聴く雑誌の会）」として行われた。『北の子供』（一九四八年十二月号）に掲載されているプログラムは、次のようなものである。

一、開会のことは あなたの学校の先生にさせていただきます。

二、紙芝居 アラジンのランプ

三、童話 花の木むらと盗人たち

四、人形劇 三つの斧

五、閉会のことは

(約二時間)

その他、希望によって高学年には「人形のやり方指導」、雑誌の出来上がるまで「などの資料を見せながら講演すると記されている。翌年の新年号には、「北の子供派遣の人形たち」——「三つの斧」の人形や、「こまどり坊や」が写真入りで紹介されている。

「こまどり座」は、一人でも愛読者のいる学校に無料で公演しようだが、『北の子供』の編集後記から、その足跡を辿ると次のようになる。

○人形劇と童話の旅・北見地方公演

6/12〜6/19 8日間16公演(一九四九年七月号)

○北見地方第二回公演

7/9〜7/23 15日間28公演(一九四九年十月号)

○第三回網走地区公演

9/29〜10/28 24日間40公演(一九五〇年一月号)

ラジオが唯一の娯楽だった時代、子どもたちが、「こまどり座」の公演をどんなに喜んだかは想像に難くない。『北の子供』廃刊後は、専門人形劇団として一人歩きをはじめた。「こまどり座パンフレットNo2」(一九五一年

六月配布)には、脚本・演出・和田義雄(児童文学者協会)、製作・美術・石川確(北海道美術者協会)(注15)となっている。専門劇団となってからは道内はもちろんのこと、石川県、東北六県にも巡演。解散までの公演日一〇〇四日、公演回数一二六一回、観客数は一〇三万人を記録したという。解散時期も資料により異なるが、一九五三年までのおよそ五年間活動。北海道で、これだけの公演記録をもつ専門人形劇団は今のところ他にない。

五、『北の子供』時代の児童文化活動・運動

1 出版界の活況と児童出版物

『北の子供』が発行されていた頃、札幌の出版界は空前の盛況であった。戦火で壊滅状態だった東京から出版社が札幌に疎開したり、支社や出張所を設けたこと、言論出版の自由が回復したこともあって新興出版社が相次いで誕生している。戦火をまぬがれた札幌には、物的条件——用紙や印刷工場があったことも大きな要因であった。

北海道出版文化祭は、当時の活況を示す象徴的な催しといえよう。一九四七年五月末から六月にかけての一週間、日本出版協会北海道支部主催で記念講演会、展覧会、記念出版など多彩な行事が展開された。来道した講師——柳田国男、長谷川如是閑、中谷宇吉郎、亀井勝一郎、川端康成、小林秀雄、河上徹太郎、田中美知太郎、久米正雄の顔ぶれをみてもその力の人れようがうかがえる。こうした出版界の活況のなかで、児童出版物——新聞、雑誌、絵本、読物などが出版されたのであった。『北海道出版総合目録』(一九四七年五月)は、出版文化祭の記念出版物として刊行されたものである。一九四五年七月から四七年五月までの既刊図書(発行見込みも含む)が収録されているもので、「雑誌目録」の「児童」の項には次のように記されている。

『ゆりかご』 週刊 ともだち社

『ともだち』 同 同

『ひばり』 月刊 北日本社

『おはなし』 同 自由建設社

『北の子供』 同 新日本文化協会

『子供朝日北海道版』 週刊 朝日新聞社

目録には掲載されていないが、出版されていたものとしては次のようなものがある。

『子供の国』 旬刊 子供の国

『コドモノクニ』（幼年版） 旬刊 子供の国

『北海道コドモ新聞』 週刊 小樽新聞経営株式会社

『北海道少年少女新聞』 北海道新聞社

『北海道小学新聞』 北海道小学新聞社（室蘭）

このほか、絵本、童話なども相当数出版されているが、公共図書館に所蔵されているものはごく僅かである。今後確認の調査を続け全容を明らかにしたい。こうした出版界の活況も、そう長くは続かなかった。思ったより早かった東京の復興で出版社が引揚げはじめたこと、用紙不足、そして売れゆきの急速な落こみなどで、ピーク時・一九四八年には百二十七社だった出版社も一九四九年には六十二社に激減している。短期間ではあったが、これだけ多くの児童出版物が出された時期はほかにない。

2 科学新聞『子供の国』と「クレオン座」

「クレオン座」の発足は、「こまどり座」より二カ月後の一九四八年八月である。「こまどり座」と同様に、出

版活動のなから誕生した劇団であることが興味をひく。

科学新聞『子供の国』（旬刊）は、一九四六年五月の創刊（終刊は不明）。発行所は子供の国で南一条西四丁目の岡本紙店に事務所があった。編集主幹は『子供の科学』で知られている科学ジャーナリスト・原田三夫である。一九四四年十二月、札幌に疎開。札幌中央放送局の嘱託として、「子供の時間」の科学番組の編成に携わった時期もあったようだ。戦後は、安田という事業家に、「子供文化協会のようなものをつくりたいから力になってくれ」（注16）と頼まれ、小熊程（北海道大学低温科学研究所長）、佐藤喜一郎（共同通信社札幌支社長）と相談し設立したのが「子供の国」であった。趣意書には、次のような設立目的が記されている。

「子供の教育は経費や設備が制限された上、規制に縛られがちな学校教育に頼ることなく、潤沢多彩な経費と設備を以て運営され、自由な構想の下に常に換気しつつ真の文化精神の発揚へ誘導する科学に立脚せる娯楽的校外施設（中略）を活発に活用しなければ効果をあげることはできない。」（注17）

主要な事業は、「子供の国会館」——図書館、動、植物園、博物館、音楽、演劇、映画などを上映できる講堂などのある文化施設の設立で、出版はその資金づくりのためだったという。原田は在札中に、『僕は原子である』、科学絵ばなし『火山』など数冊を刊行。一九四六年八月には、家庭雑誌『ぼとん』（佐藤喜一郎監修）を創刊。『子供の国』がいつまで発行されていたかは不明だが、原田は一九四八年七月には東京へ戻っている。

読者サービスに、「三越子供劇場」を催したのが同年八月。子供の国の社員達がつくった劇団が「クレオン座」で、仮面劇を上演。来道中の専門人形劇団「おんどり座」（土方浩平主宰）の応援もあって成功。このとき、「人形劇のもつ魅力に目をみはり、クレオン座も人形劇団として子供の懐に飛び込んでいく決心をした」（注18）という。その後、土方浩平の熱心な指導を受け、翌年の正月には、第二回「三越子供劇場」を開催。以後、専門人形劇団として歩きはじめる。パンフレットには、「民衆に愛され、理解され、民衆のためになる民衆の人形劇」という劇団の理念が記されている。発足当時の劇団員は石川加久（確）、井口幸治など九名であった。その後、

北海道教職員組合の後援で全道の小学校や炭鉱などを巡演したが、一九五〇年劇団の理念、運営をめぐる対立があり解散している。石川確が一人歩きを始めた「こまどり座」に加わったのは、この後のことであろう。

3 『北の子供』創立三周年記念愛読者大会と「札幌子供会」

愛読者大会は、一九四八年六月五日（於中央公民館）に、次のようなプログラムで催された。

一、腹話術 澄川 久

二、童話 小野三男治（札幌子供会友会）

塚本 長蔵（童話家）

小林 覚一（童話家・歯科医）

三浦 一（北海道児童文化会）

三、人形劇 こぶとり爺さん

演出・和田義雄（劇団こまどり座）

四、僕等の歌 一幕

作・演出 五條 彰（新劇人協会）

音楽 青木 暢朗

舞台監督 鈴木喜三夫

出演者 和田義雄、高橋英衛、石橋 冠、岩花達夫ほか

このプログラムには、当時の札幌の児童文化活動が集約されているので、若干の解説を加えたい。

口演童話の四人は、戦前から語り手として活躍した人たちである。なかでも小野三男治、塚本長蔵、三浦一は、北海道口演童話界の三巨頭といわれていた。札幌師範学校在学中に「桃太郎会」、「青い鳥童話会」などで口

演童話を研究・実践した。卒業後小学校教師となつてからも、口演童話を中心とした児童文化活動を展開している点は、三人に共通している。その語り口については、「小野は講談調、塚本は落語調」「三浦は純粹な童話らしい童話」だったと伝えられている。

児童劇「僕等の歌」出演者は、和田義雄と高橋英衛（歌人、『北の子供』にも寄稿）を除いて、「札幌子供の友会」と、彼等が所属していた三つの中学校の演劇部員たちである。「僕等の歌」は五修彰作となっているが、この作品は丘一太作の「うたをわれらに」の脚色と思われる。『北の子供』（一九四八年六月号）に脚本を掲載、当日は舞台装置を組み立てるところを観客にみせるなどの試みをしている。出演した中学生たちは専門家の演出で大変な張り切りようだったようだが、「会場満員の子ども達を湧かせたことが印象的」（注19）だったという。

「札幌子供の友会」（第二次・戦後）は一九四七年五月に発足。小野三男治を中心に和田義雄、小林英一、塚本長蔵、小林覚一ほか四名が世話人として名を連ねている。趣意書には、「新しい時代に生き、更に新しく正しい時代をつくっていくにふさわしい教養を身につけた世界的性格をもつ子供たちを育成することに力をつくしたい」と述べている。会員は、「十二歳から十六歳まで」で、「それ以上は奉仕会員とします」とある。

例会は月一回、活動の主体は、「本を読むこと」で、読書の間に世話人による口演童話や紙芝居が行われた。会場は野外・公園が多く、雨天だと学校の体育館などを使用。奉仕会員の仕事は、小野宅からリヤカーで本を運ぶこと、司会やゲーム、ときには口演童話や紙芝居の役もまわってきて、それがまた楽しかったようだ。そうした活動が続けるうちに、奉仕会員が核になり、「子供の友会唱歌隊」などをつくり、歌や紙芝居劇・児童劇で活躍。当時盛んだったあちこちの子ども会に出演している。『北の子供』の愛読者大会の出演もその一つであった。『北の子供』と「札幌子供の友会」を結びつけたのは、両方に所属していた和田義雄である。「札幌子供の友会」は「児童文化の学校だった」といわれるほど、のちに教育・文化・芸術の分野で活躍する人材を育てたことは記憶されてよい。

六、『北の子供』の評価について

『北の子供』の評価に関する資料は少ない。ここでは、木村不二男と諸角和儔の評についてふれたい。

木村不二男（一九〇六—一九七〇）秋田生れ。函館師範卒業後、小学校教師となる。『赤い鳥』に児童作品を発表、鈴木三重吉に知られる。一九四五年渡島管内森町に疎開、高校教師となる。一九六三年退職後、文筆活動に専念。『童話』に鈴木三重吉を連載。童話集『ニシパの祭』、小説等がある。『北の子供』には、伝記物語を数多く執筆している。

木村は雑誌『札幌ペン』（一九五六年）に、一九四六—七年の出版物・雑誌についての評を掲載している。次に引用するのは、『北の子供』発行当時の読後感を記したノートから抜粋したもので興味深い。

一九四六年五月号 「雑誌全般技術面にかにも貧しい北海道が見え、東京からであるものとは比較にならぬ。二冊まとめてどちらかをとれといわれたら子供の手はやはり東京出来のものにだされるだろう。」（注20）

一九四六年八・九月号 「全体として昔の『赤い鳥』をめがけている良心はよくわかり、意図も杜とするが、距離はかなりある。」（注21）

一九四七年一・二月号 「読物、童謡もようやく水準に達した充実ぶり、後者はことにこつがわかってきたらしい。」（注22）

一九四七年八月号 「この雑誌よくつづくものだと感心する。」（注23）

諸角和儔（一九三二—一九七三）は旭川生れ。日本児童文学者協会北海道支部創立会員の一人。一九五八年『児童文学評論』を独力で十一号まで発行。十二号は没後夫人が刊行。『北の子供』にも寄稿している。

諸角は「北海道（戦後）児童文学小史（二）」で次のように述べている。「戦後の混乱しているときにいち早く

『北の子供』というローカル溢れた雑誌が誕生し、平和な人間的教養を子ども達に与えたこの仕事は見落としてはなるまい。」とし、「北海道にはすぐれた作家が相当いるし、その作品を注意してみると、決して中央のジャーナリストチックな人に劣るものではない。『北の子供』こそ鈴木三重吉の『赤い鳥』北海道版である。表紙は梁川剛一に書かせ、廃刊近くには中央の『赤とんぼ』、『銀河』に劣らない中々垢ぬけした雑誌」(注24)

木村の評は、『北の子供』創刊から次第に充実していく時期のものであり、諸角のは、終刊後ときを経て、『北の子供』が果たした役割にふれた内容である。二人の評は、その時期や視点は異なるが、児童文学に関わった人の評として貴重である。

むすび

『北の子供』の評価については、さらに掲載作品、児童の作品などの検討、同時代の児童誌との比較検討などもすめなくてはならない。今後の課題としたい。

これまで述べたように、戦後初期の北海道の児童文化活動は、戦前から活躍していた教師たちによる口演童話を中心とした子供会活動、そこで育った人々、疎開していた作家、画家、ジャーナリスト、北海道公演に訪れた劇団の人々、公演を支えた北海道教職員組合や炭鉱労組の人々など——さまざまな分野の人々の願いと出会いによって展開されたといつてよい。『北の子供』は、そうした地域の児童文化活動・運動と深く関わっていたことがわかる。短期間ではあったが、戦後の混乱期に『北の子供』が北海道の児童文学・文化史に残した足跡は大変に大きい。その後の北海道児童文化活動、運動に、それらがどう受け継がれたかを探ることも新たな課題となるだろう。

この研究をすすめるにあたり、ご指導下さいました西田良子先生、貴重な資料を提供して下さいました紀国谷良雄様、上地ちづ子様、高野名正治様、杉浦幸雄様、井口幸治様に心から感謝の意を表します。そのほか多くの方々に、お話を聞かせていただきました。記してお礼申し上げます。

注

(注1) 谷 暎子「児童文芸雑誌『北の子供』解題(一)と細目」『北星学園女子短期大学紀要』第二十七号

一九九一年

(注2) 小林英一「文化だより」『北の子供』創刊号 新日本文化協会 一九四六年 六十三頁

小林英一は新日本文化協会の実践部長で、通巻一〜五号まで「文化だより」を担当。「札幌子供の友会」などで活躍。戦中は日本教育紙芝居協会の普及部員であった。

(注3) 釧路市在住。一九四五年十二月〜四十六年五月まで新日本文化協会に実践部員として勤務。のち『北海道コドモ新聞』(小樽新聞経営株式会社)の編集に携わる。その後東北福祉短期大学に学び、一九六〇年以降、釧路市の児童福祉界で活躍。著書に『子ども遍歴の旅』などがある。

(注4) 『紙芝居』一九四二年九月号 日本教育紙芝居協会 七十七頁

(注5) 上地ちづ子「紙芝居の歴史」『心をつなぐ紙芝居』童心社 一九九一年 二四四頁

(注6) 園池公功「北海道の旅」『紙芝居』一九四三年新年号 日本教育紙芝居協会 二十三頁

(注7) 2の前掲書 六十三頁

(注8) 紀国谷良雄「戦後の児童文化の曙光」『子ども遍歴の旅』非売品 一九八九年 二十九頁

(注10) 杉浦幸雄「昔の漫画仲間」『まんが交友録』家の光協会 一九七八年 一五六頁

(注13) 和田義雄「チンモク先生とボクー」「峠の子ら」前後』『支部沈黙人と作品』 江別文化振興会 一九六九年 八十頁。支部沈黙(一八九二〜一九七六) 本名貞助。道内のいくつかの小学校に勤務しながら創作活動を続けた。童謡集『蟻のお城』などがある。

(注14) 一九五一年六月に配布された「こまどり座パンフレットNo2」に、次のような公演記録がある。(自一九四八・六月、至一九五一年・五月) 実働日数二九六日、上演回数三三六回、動員数三二一、〇〇〇人。

(注15) 石川確(一八八五〜一九六三) 福井県生れ、東京美術学校卒。札幌の北海道大谷中学・高校・大で美術を教える。アカデミックな技術を持つ洋画家として知られる。北海道近代美術館に「立てる裸婦」所蔵。高校退職後「素朴なギニョールの舞台に、私の余生を捧げて悔いがない」といい「クレオン座」、「こまどり座」で活躍した。

(注16) 原田三夫「戦中と戦後」『思い出の七十年』 誠文堂新光社 一九六六年 三六〇〜三六一頁

(注17) 家庭雑誌『ぼとん』創刊号 子供の国 一九四六年八月 二十四頁

(注18) 「たくましく成長する人形劇団クレオン座」注目されるその活動』『演劇しんぶんHOKKAIDO』No1 演劇人協会北海道支部 一九四九年八月十一日 四頁

(注19) 鈴木喜三天「各地の児童文学・文化——札幌周辺」『北海道の児童文学』 北海道新聞社 一九七九年 三十七頁

(注20) 木村不二男「北海道雑誌供養碑——昭和二十一年——」『札幌ペン』四月号 札幌ペンクラブ

一九五六年 十四頁

(注21) 木村不二男「北海道出版物供養碑(二)——昭和二十二年」『札幌ペン』七月号 札幌ペンクラブ

一九五六年 五十頁

(注22) 同右 五十二頁

(注23) 同右 五十四頁

(注24) 諸角和尙「北海道(戦後)児童文学小史(二)」『児童文学評論』第三卷第一号 一九六一年 十七頁

参考文献

これの樹会編『北海道の児童文学』北海道新聞社 一九七九年

日本児童文学者協会編『児童文学の戦後史』東京書籍 一九七八年

日本児童文学者協会編『復興期の思想と文学』偕成社 一九七九年

岩崎義純『昭和二〇年代の札幌の人形劇』非売品 一九八七年

土方浩平『おんどりの歌』講談社 一九七一年